

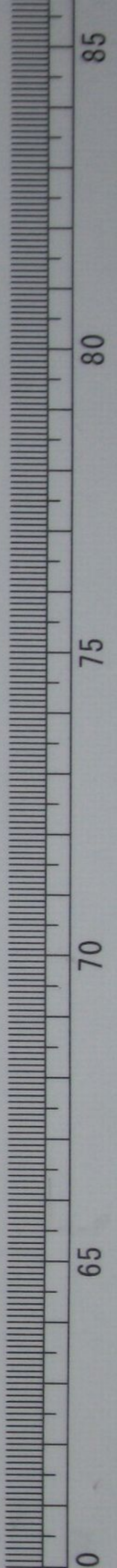
明治
八年

新聞小學
單

西垣文庫

文庫 10

731.1





流行

當世

新聞小學

三篇

林居
外史
謹



特 文庫10
7311

當世新聞小學三篇

依田百川先生閱 岡 敬孝編

強盜の歸善

武藏國入間郡藤沢村の無宿此あぶき者小境野代五郎とつふそけあり賭博争鬪せどあそびやなく名高き惡漢あそびが先の年或る家子推し入る人を叔し盗みとせし事覺きて旧浦和縣の為に捕られ久しく獄中入り然るに去れ代五郎を獄中入りしより忽ち一念翻して舊惡を悔い良善の人とある固よりさる有名の惡漢なれば獄中の罪人等る恐を服して自

西澤文庫



然しか獄ごく中ちゆうの長ながとあまゝが能よく兇あや暴まを制とし微よ弱じやくを恤あは
 み頑く愚ぐの兇あや徒たら痛いたく懲ちやう免めんてその惡あくを戒かいめ教ま訓うし或ある
 る一時いつし乃すなは誤あやるよりて入あ獄ごくまはをけら厚あつくその誤あやを
 説とき諭まし獄ごく中ちゆうの苦くる難なんを受けしめ殊ことに罪つと囚ひの兩ふた度たび
 反はん獄ごくまはをのあまゝと犯とり代だい五ご郎ろうの手てに屬ぞくするを
 けら一人ひとりもそは謀まるる與あまはりけらかくて斯あ事こと縣けん
 廳てい不ふ聞もんへけまバ死し罪ざいに處あせらはるる地ちをのなれやも
 縣けん吏し憐あみみて其その期きを延のび浦うら和わ縣けん廢はいせらばしと地ち崎さき玉たま
 縣けんも移うつりしに代だい五ご郎ろうの歸かへ善ぜんまゝに著あきけをバ任ま申ま
 の四し月げつ終つひりその次つぎ弟あを上あ申まあり死し罪ざい一ひと等とう減へんし准しん

流十年の處をくらねて猶獄中よりあり代五郎を再生の
恩を蒙りしと感涙を流ししよりしと身の行をま
ましく慎み同繋の罪囚等と偕し工作の役をつとむる
お浪子先で勉強し賞状賜ふはるや数度たりしは
蓄めは金若干ありこれを郷里に送りて父母を養は
んと願出しバ奇特の事ありやと願の如く送り遣
さふかくてやと父母と對面して日頃の不孝を詫と
しと願ふ是もまゝと免許あり明治七年七月十七日代
五郎の父役場より來りて絶て久しき對面し喜びの涙
を咽びしといふ此日代五郎と同く捕またりし賊

東京神田豊島町の熊次郎弟新吉ハ辛未の歲十月反
獄せしに頭まで再び入獄しるりしが斬罪に處せら
まゝより同く悪行せし賊も一人ハ善み歸りて父子對
面のよほさびあり一人ハ積惡の報いまして是日以
同くしと斬首の悲となる善惡の應報の速なる實
み恐れとも恐るべき事ありといふ

④ 貞節の寡婦

朽木縣下第一大區小五區下野國都賀郡吹上村ハ
と有馬家の米地ありしが旧藩士鈴木誠吉ハ妻名以
幸とりしものあり誠吉ハ先づ年慶應の戦に打死し

丁寡婦とわれども誓て人未嫁らば明治七年三十歳
 ぶかりぬ夫失せし後を禄も薄く坐すしを食ふべく
 もあらねば浴湯をもて産業といふ幸女極て力強く身
 體も肥太りて量目二十二貫目あり日々未費す所の
 薪と一人ありて半日ぐ程に盡くられを折る水を汲
 入るゝ日お幾擔を知らざれども更し苦勞といふ
 る此意ありされども幸女斯る業以爲まね似とやら
 ぶ顔色醜うもば絲竹の藝に暗うらばしを折節毎に
 人お招うは酒宴の席に至り歌曲を奏するは其の
 妙なるは及ぶをゆゑに實に稀有なる奇女子あり



④ 婢僕の誠忠

加賀の國第十八區小三區木沢村の農家、小笠原小右衛門といふ者あり、其家、文化八年の頃より仕へたる老僕松本宗兵衛といへる者、又天保八年の頃より仕へし老婢寺井みよといふものあり、宗兵衛は明治七年、七十七歳となりぬ、當主小右衛門が幼きと、其家産大に傾き殆ど饑乏に迫り、宗兵衛は己が蓄持する衣服調度を盡く賣代り、借財を償ふの助し、給金を一錢も受くる事なく、盡く主家に納きて、朝早く起き暮遅く眠り、粉骨碎身、唯主家の興



隆たかの心こころをこころ盡つくせしまをま一度いちど衰おとろへたま主家しゅけ
もも此こ老僕らうぼくの力ちからもも漸ゆるく再また興おこるま至いたり又また
みよみよも同おなくら此家こゝの事ことへま忠誠ちゅうせい貞實ていじつ宗兵そうべい工こう
勝かちり劣おとりなく殊ことにその身みの親戚しんせき尽つくく死絶しつてつて家いへを續つづ
べきをりし主人しゅじんの貧苦びんくを見みるに忍しのびば辭ありて家いへ
ふりへらば刺さすん己おのが所得しよとくとまべき家財けざいとま盡つくく賣う
て主家しゅけに納ねて衣食いじきの料りょうとかかりて兩人ふたりの忠誠ちゅうせい速すみ近ぢ
知らしらざる者もの無なりしば元治げんじ元年前げんねんまへ田家でんけの領地りやうちたり
一時いちときその忠ちゅうを賞しょうせられて宗兵そうべい工こうハ米こめ三石さんごく五斗ごとを
賜たまひしは二石にごく五斗ごとを賜たまひしハ兩人ふたり感激かんげきして

喜よろこみ堪たへば即すなはち賜たまふ所ところの米こめを殘のこらば主家しゅけに納ねきて
一合いちがう一夕いちやも私わたくしに用もちあるこやなしその後のち昨きのう明治めいじ七年しちねん
に至いたるまゆぎ忠義ちゅうぎの志こころ少すくも移うつらば此事このこと縣廳けんていに聞きへて
感賞かんしょう淺あうらず篤あつく其その行狀ぎやうじやうを褒ほめ兩人ふたりに各おの一圓いちえん五
十錢ごじゅうせんの賜たまひしとまば

これハ古ふるき物語ものがたりなれど佐倉藩さくらはんに圖司ずし齋宮さいみやといふ
をけあり幼こあして父母ふぼを失うひ頼たのむべき親戚しんせきあらう
了し一人ひとりの老僕らうぼくに名なを大助だいすけといひけるが幼主こしゅ
を守り育そだて家いへの貧ひんくて借財かざい多おほうらうし己おのが草鞋くさじ
以もて製つくり米こめを舂つくきてま盡つくくまこれを償たがひ終おつま幼主こしゅに學まな

問武藝を學ぶに成人に至りしに藩主厚く褒賞を加へて奴僕之鑑とせられしに夫の老婢僕も亦その類なるべし

⑤ 廢人の勉勵

身體壯健にして世に用なき棄物あり兩手を失ひても人子勝る業あり人ハ唯勉勵と怠惰とに
 一子ハ別あり越後國今町新田の農夫吉田六藏が
 漸に腐まじり家極て貧まがらん
 一戌辰乃戦に兵火
 家を焼れて父母も共病に打臥すほととぢれむ僅



不食残乞て命を繋ぐみと療養を乞ふに餘財も無きば
幾程もなぐ兩腕まぐ腐き落て終つて廢人と成るに
りさねども去る已の歳より母の病を愈て家活るや
ふやく立をれあら竹次郎も兩腕を死人とあまて生
甲斐なきいふにゆもして人よ勝まて業代學をやと自
ら勵と去る申年より私塾の師水内九内といへる者
ふ従ひ日用の文字より習ひ始むるに筆を口ふらわ
へく書き習ひ又足の指ふ挿みて書く遂よく鍛鍊
し筆勢の妙指を用ふるがごとく又画をかきしふ
ふ址うらげ頃日る小學の書と読終りて更に漢籍ふ

涉り師より句讀の補助と命ぜらる廢人ありて人を
教人も嗚呼が悔しとて辞すきねども村里ふ文字疎
きもの多きは簿書のいそがけにせよ雇はれ
てこれを書け大人より便利に已もほと雇錢を得る
こと餘の力役をを勝まりやを東京の俳優沢村田之
助も兩腕をくして能く演戲を為せしハ世の知る事
なれども賤しき技藝なれども賞美を乞くも非
ずおの竹次郎も廢人と成りて文學書法を學ぶる實
ふ得ぐうに人物をふべし

⊕腕肉を削りて兄の疾を療は



漢土の古己が身此肉を割きて薬と和し父母の病を
 治ししと物を見へるれども實効驗ありや否
 信トがと然るも愛知縣管下愛知郡中根村の伴新
 蔵が兄新左衛門の為己肉を削りたるは實ルそ
 此事あるはとらん病も愈て其義名世に著し尋る
 此らの新蔵は農家の子ありて平生兄弟の睦き事父
 子の如く兄新左衛門或る時誤ちて熱湯を足に灑ぎ
 片膝屈して伸るまゝ能くは新左衛門が妻は夫の廢
 人とちて一々厭ひて離別を為せしが新蔵は誠實乃
 男ぢれば貧苦のうちふも必抱療養疎うぢらんといふ

その一を兄の創を療治せざるやと思ひしが近頃名古屋の病院には西洋の名醫ありやき、終に兄を病院に伴ひ治療を請ひたるが既にして平愈小近うに教師ヨニクハン氏の云ひけるは、此病人の傷處の肉腐り落て隙を生ぜり、これ終にせば再び屈して伸びざるに至るべし、一術あり人肉を取りてこれを補ふ血液流通して元の如く屈伸自在を体ぞけざるも人肉を削くや極むて難きことありと歎息せし、此き、新蔵の大に喜び兄の爲にせんともあらざるうで我身以惜むべき速ふ已が肉以てそ

これ料ふせきせ給へと請ふると頻あれば教師その誠心を感じ、さば先づ麻薬を服して後截らんといひ、此新蔵きうん只此終めて苦しうらばといふ教師益驚き感、遂に剪刀を以て新蔵が左の臂の肉を剪み取るや幅二寸更し細く截りて兄が傷所小付るころ九ヶ所より血流きて滝をなせども新蔵少も痛しと思ふ氣色あり、新元工門ハ見る人思はず涙を流して頻りふこれに止むれども新蔵ハいうてり聽べき終に療治を終りしうけ果して教師の言ふ違ふに傷所全く治しを屈伸自由おちりけり、此事縣

廳おに聞きへて感あむるゝ大方おほなるべし備つはえらるゝ内務
省せう以上じやう申まあへりし古今ここん未曾みぞう有うの異い事じをれむ群ぐん議ぎを
あらしまゝ賞しょうせんともねば支し體たいを傷き損そんして性せい理りは
害がいまゝの失あり賞しょうせざらんともねば其その至し誠じやう惻そく怛たんより
生せいむるもの古こ今こんは比ひ類るいをれ行ぎやうあり宜よろく廣ひろく下しも問もんを
垂たれその宜よろまに従ふ可べき者もの歟やと内うち務む省せうの議ぎよりは
賞しょう以い賜みする可べき定まめて伺うかはまらば太たい政せい官くわんより伺うか
の通つう賞しょう金ぎん五ご圓えんを賜たまり後のち来き性せい理りを矯まる弊へいの生せいざら
んが為ために賞しょう詞じの時とき心こころを附つづき旨おほ命めいあり即すなは愛あい知ち縣けん廳てい
りて新しん藏ざうを呼よ出だされ厚あつく其その意いを諭さとて賞しょう賜みありこれ

ハ是これ明めい治ち七しち年ねん十じゅう二に月げつ廿にじゅう六ろく日にちの事ことなり

⑤ 少女せうにょの機ち智ち

滋し賀が縣けん管くわん下か高こう邊へん郡ぐん野の口ぐち村むら農のう夫ふう清せい太たい夫ふう姉あねハ或ある家いえに
嫁よめして一ひと女にょ以い儲たくわけし故ゆゑありて離り別べつして十じゅう年ねんあらむる
女にょを連つて家いえに返かへりし此この女にょ子し年ねん幼せうけをしも伶れい俐りな
るを尋ま常じょうるを母ははを助たすける老おい祖い父ふ母ははが農のう業ぎやうに代たり
勤こまるを成せい人じんの如ごとく祖お父ふ或ある時とき一ひと匹びきの馬うまをか買かひしこれ
をもて近ま隣りんの荷に物もの以い運えん送そうするを見みば多おほくの賃ちん錢せん以い
得えべしして幼せうき女にょ子しの命いのちにかこれを牽ひしむるを女にょ
子にょハよく其その教おしへして従したがひて急いそぐを見みば祖お父ふハ孫まごの可べ



愛さゆき 過もや有んうや孫女が馬を牽て出ると
 知ハ必後それ後よつき従以て去往を見る或日の事
 道最狭き所を牽行しこれ他の馬騾狂以て
 駆け来り牽ける馬に突當りて争を生せしを祖父
 此これを見と大に驚き早く逃よ傷せぬらちこなご
 へ来ると叫ぶれどこれ幼女ハ毫も驚く色あく祖
 父をかこいて馬にあつらへて寄つけに着たる上衣は
 手早く脱ぎ争ひ狂ふ騾馬の頭へひらりや打つけ
 うば流石怒まぬ馬をわと思もぐれお氣は呑まぬ
 と忽ち争ひ静まらば幼女は徐に鑢を取り祖父を

多しと牽行たりとれを見る人舌は捲きて幼女の
 智慧に感服し譽めを述べたりとあり幼女の母は
 平生父母に孝な色ばかりは娘を生しとけうを評し
 けうを評し

④ 灸はよく灸子に殺されし話

東京本所松代町二丁目に住むは又吉といふ男あり
 家あり父あり兄ありて巴る寄り居あり暮るるはな
 るが平生酒を嗜みて酔ふとけは父子兄弟の別なく
 悪口乱言し甚しは至りては拳で揚る事ありあり
 明治七年十二月廿四日例の如く泥酔し足を踏まると



ろ小歸り来り父平吉ちひらきちに向ひ聞き得堪ぬ惡口あくぐち果は
のゝる家いへに居ゐるべきや迎むかふの事ことは焼拂やきさらひと困こらせ
んと罵ののりけきは父ちち大おほに怒おこり兄あにの稻吉いねきち姉あね婚むかひと龍りゆう三さん
郎らう等ら姉あね娘むすめをと人ひと呼よ集びへ又また吉きち取とりて押おへ手て足あし以も緊きし
く搦なめ置おき聲こゑ立たせしと口中くちゆうへハ手て拭ぬぎをおしこ免ま
て敷しき多おほの艾あ葉は以もて足あしの背うら以もておと敷しき度た皮かわハ焼や
きで真ま黒くろハなるほとあれど又また吉きちハ叫なぐんといふ子
聲こゑ出いでず起おきんともる子大おほ勢せの力ちからハ押おし事をれ
ハ終はみもぐ地ぢ苦くつ忽ち息いきハ絶と果こてちと生いべうも
あらぎをけり父兄等ちちあにらハ斯かとも知しらぬと今いまハ善よき頃ころ

あらんまれまをは少すくな懲こるなあらとと引ひ起おきたれ
身み體たいは冷ひやて息いきをあけ皆々みなあらとと駭おそげども時とき移うつり
事ことなれハ藥くすりよ水みづと介ま抱かきはる遠子とほをは証あげらうと
ありけくて已や可べ知し非あらまは速すみに訴う出でし以明ある八年ねん
三月三日さんげつさんじつ裁さい判はんありて平へい日じつの暴あ行ぎやう以もて教ま戒かいとれ改あらむ
免まひ遠子とほ自みづか宅たく以もて燒やんといふる小至こり其の兒を懲まん
やせしに偶な死し致いたす律りつ文ぶん人ひとの子こ孫そんやしをはる祖
父ちち母ははをは罵ののりを死しせし祖ちち父はは母はは及あひ父母ははの折せ
檻いふ及ひ遠子とほの子を死せし至こらしむら罪つみを
しとあらるに定さめらるに若わかきをはハ慎しんみ戒むべき

酒^{さけ}なり又懲^{しこら}め^らる能^よ々^ら心^{こころ}を可^よき事^{こと}なり

新聞小學卷之三終

明治八年

刊行所

報知社

東京藥研堀町

大坂本町四丁目

賣捌所

河内屋真七



